資料 No. 3

ヒメギフチョウの現状と保護活動について（報告）

1　ヒメギフチョウと生息環境

（１）ヒメギフチョウとは

・チョウ目アゲハチョウ科ウスバアゲハ亜科ギフチョウ属（４種）
・生息適地は落葉広葉樹林、いわゆる雑木林
・幼虫の食草（＝産卵場所）はウスバサイシンの葉
・日本以外に中国北東部、ロシア沿海州に分布
・日本列島内では北海道、東北地方、中部地方に分布（亜種 2 系統あり）
・関東地方では群馬県渋川市の赤城山の一部のみに生息
・国（環境省）のレッドデータでは準絶滅危惧種に選定

（参考）

・同属４種のうちギフチョウは日本固有種、本州の南半分を中心に分布、絶滅危惧Ⅱ類
・秋田、福島、新潟、長野、岐阜等の各県には両種が生息する

（２）群馬県におけるヒメギフチョウ

・成虫：４～５月(約 2 週間)、幼虫：５～６月、蛹：６月～翌年４月
・日本における分布域のなかでは他地域より狭い範囲に生息
　かつては赤城山麓各地や沼田方面でも見つかっていた
・発見者は理科教員の田中恒司氏（前橋市住、旧北橘村八崎出身）
　1940（S15）年に旧敷島村見間入で発見、雑誌に投稿し世に出る
・1960 年代に激減、1969（S44）年以降見られなくなった
・1981（S56）年民間愛好家の大橋健司氏（桐生市）が現在の生息地で再発見
　再発見の場所は炭焼きが行われるミズナラ等の落葉広葉樹林
・乱獲等による再度の危機を受け、県の天然記念物に指定
　指定年月日：1986（S61）年３月７日
　所在地：群馬県下全域（今後の新たな生息地発見の可能性を考慮）
・群馬県レッドデータ（自然環境課）　2022(R4)発表で絶滅危惧ＩＢ類
　→本年 5 月末の部分改訂で絶滅危惧ＩＡ類（別表の評価区分を参照）

（３）ヒトの生活環境とヒメギフチョウの生息環境の変容

①昭和 30 年代以前
　ヒトが管理する「里山」　木材（薪、炭、建築材）、落葉（堆肥）、採集・栽培等
　↓
②昭和 30 年代以降（高度経済成長期）

化石燃料や化学肥料、外材の輸入への移行
↓
③雑木林（落葉広葉樹）・植林（針葉樹）が更新されない、山に人が入らない
木質材料の利用機会の減少が山林の荒廃をもたらし、そのことが生息環境の減少につながっている

２　保護のための取り組み

（１）これまでの保護活動

＜ 1986（S61）以降＞

①保護啓発パトロール
・県（文化財保護課）、地元小学校（南雲小教員）、保護団体、市教委が合同で実施
・毎年４月末～６月中旬の日曜・祝日、期間中は啓発用横断幕を設置

②「赤城姫を愛する集まり」　1987（S62）年結成の民間ボランティア団体
・生息域全体の産卵数調査、記録化（会誌作成）等
・自然観察会（一般向け、地元小学校向け）、出前授業（地元小学校）

③小学校（南雲小→津久田小）
・授業内学習、自然観察会、ドングリ苗移植等、保護啓発看板作成・設置
・現在は４年生の「総合的な学習の時間」で実施

④地元住民
・有志（南雲小校区の保護者中心）主体で下草刈り・枝打ち（年１回、秋）

＜ 2007（H19）以降＞

⑤一部の幼虫を一時的に人工飼育（県の現状変更許可後）
・2007（H19）　記録上で３番目に少ない 752 卵、県立ぐんま昆虫の森に依頼
・これ以降断続的に一部人工飼育を実施、昆虫の森への依頼は３回、市でも実施

⑥ヒメギフチョウ保護連絡協議会
・活動を連携して行うため 2009（H21）年に結成、情報共有・保護対策の検討の場
・生息地の広葉樹林を里山に近い状態に維持するための刈り込みを実施
（県補助事業、H21 ～ R2 まで）
・園芸用品（支柱・ネット）による防獣柵の設置（R3 ～ 4、直営）

⑦ヒメギフチョウ保護管理計画
・指定文化財として適正な管理、計画的な保護対策の立案と遂行を目的とする
・協議会で検討、県の指導を受け 2011（H23）年に作成、５年ごとに更新
・過去の経過、保護体制、生息環境整備、保護管理方法等を掲載
・最新版（R3 ～ 8）は食草増殖、シカ食害対策が追加されている

（２）2023（R5）年、絶滅の危機に直面

①成虫の目撃が激減

５月４日の自然観察会で毎年何頭かは確認できていたが、この年は皆無

②産卵数調査の結果も壊滅的（10 卵塊９３卵）

前年の 2,196 卵から急激な減少

今まで最も少なかった 612 卵（R 元）をさらに大きく下回る事態に

※自然界では、卵から成虫まで生き延びるのは２～３％と言われている

③緊急事態への対応

保護連絡協議会で協議→県へ現状変更申請→許可を得た後に実施

＜昨年度＞

現状変更Ⅰ　93 卵すべてを生息地から回収し、人工飼育を実施（昨年５～６月）

・すべて人工飼育するのは初めて、リスク分散のため２か所で行う

・県立ぐんま昆虫の森の協力（蛹になるまで、以後は市で管理）

・蛹４９頭を確保　11 月下旬～ 4 月中旬まで生息地で冬越し

現状変更Ⅱ　獣害対策専用品を使用した防獣柵の設置（昨年１１月）

・ウスバサイシンが多く分布し、産卵実績がある場所から 3 地点を選択

＜本年度＞

現状変更Ⅰ　羽化・交尾・産卵まで屋内管理、産卵数確保へ（今年４～５月）

・羽化した成虫 41 頭（雌 21、雄 20）

・交尾 18 ペア、うち 11 頭の雌から 20 卵塊計２４９卵を確保

・外部専門家（民間人）の技術指導あり

・産卵後は全個体を生息地へ→放虫後に山で産卵あり（19 卵塊１７０卵）

現状変更Ⅱ　卵を２か所に分け蛹になるまで人工飼育（今年５～６月）

・県立ぐんま昆虫の森協力、施設の判断で幼虫の一時展示を実施

・食草の確保にあたっての赤城自然園の協力

・蛹１１９頭を確保（現在は市施設で管理中）

現状変更Ⅲ　生息地内での卵塊の移動（本年５月）

・放虫後に確認された１９卵塊を防獣柵内へウスバサイシンごと移動

現状変更Ⅳ　前年度に引き続き防獣柵を設置（未申請）

・設置箇所、時期は検討中

３　現状でのまとめ

→不確定要素が多く、ノウハウの確立にはほど遠い状況

・18 ペアが交尾したが、飼育下の産卵は 11 頭のみ（羽化・交尾時期のずれ？）

・人工交配には外部人材の技術協力が必要

・249 卵のうち孵化しない卵がまとまった数見られること

・そもそも前年の激減の原因は何かがわかっていない

（再度同じこと、あるいはさらに大規模な異変が起きる可能性もありうる）

＜今後の検討事項＞

・防獣柵の設置箇所について

・来年度の蛹の取扱いについて

絶滅の危険度の評価区分

絶滅			我が国ではすでに絶滅したと考えられる種
野生絶滅			飼育・栽培下、あるいは自然分布域の明らかに外側で野生化した状態でのみ存続している種
絶滅危惧			
	Ⅰ類		絶滅の危機に瀕している種 ・現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生での存続が困難なもの
		ＩＡ類	ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの
		ＩＢ類	ＩＡ類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの
	Ⅱ類		絶滅の危険が増大している種 ・現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、近い将来「絶滅危惧Ⅰ類」のカテゴリーに移行することが確実と考えられるもの
準絶滅危惧種			存続基盤が脆弱な種 ・現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」として上位カテゴリーに移行する要素を有するもの
情報不足			評価するだけの情報が不足している種

産卵数の推移表

	A・Bポイント (Y)		Dポイント (M)		Cポイント (K)		合計		備考
	卵数	卵塊数	卵数	卵塊数	卵数	卵塊数	卵数	卵塊数	
H6 1994	454		85		2,843		3,382	0	
H7 1995	1,847		450		2,686		4,983	0	
H8 1996	153	17	250	28	2,102	225	2,505	270	
H9 1997	843		861		2,848		4,552	0	
H10 1998	846		734		1,802		3,382	0	
H11 1999	995		424		−		1,419	0	Cポイントの産卵調査実施せず
H12 2000	654		753		−		1,407	0	Cポイントの産卵調査実施せず
H13 2001	962		426		593		1,981	0	
H14 2002	232		544		1,438		2,214	0	
H15 2003	542		692		1,973		3,207	0	
H16 2004	455	51	861	99	2,267	229	3,583	379	父親クラブ下草刈り実施開始（Kポイント）
H17 2005	1,485		1,325		4,501		7,311	0	
H18 2006	558		1,297		1,313		3,168	0	
H19 2007	67	6	68	6	617	68	752	80	幼虫保護飼育実施（昆虫の森）
H20 2008	0		228	27	3,404	340	3,632	367	生育域環境整備開始
H21 2009	11	4	355	39	1,355	128	1,721	171	**保護連絡協議会結成** 県補助による生息域環境整備開始
H22 2010	40	5	175	19	901	99	1,116	123	幼虫保護飼育実施（昆虫の森）
H23 2011	6	1	236	25	888	91	1,130	117	幼虫保護飼育実施（昆虫の森・一部渋川市） **保護管理計画策定**
H24 2012	11	2	1,335	131	2,293	243	3,639	376	幼虫分散実施、 盗難卵数151（14卵塊）
H25 2013	66	8	966	115	2,836	305	3,868	428	盗難卵数137（12卵塊）
H26 2014	193	21	1,451	156	5,251	561	6,895	738	幼虫保護・分散実施
H27 2015	195	24	1,169	132	1,557	172	2,921	328	盗難疑卵数272（30卵塊）
H28 2016	130	17	978	117	702	74	1,810	208	幼虫保護飼育（渋川市）・分散実施 盗難疑卵数360卵（37卵塊）、実質1,450卵(171卵塊)
H29 2017	81	9	373	36	917	105	1,371	150	幼虫保護飼育実施（渋川市）
H30 2018	102	11	826	98	2,173	234	3,101	343	幼虫分散実施
H31 2019	19	4	385	41	208	24	612	69	幼虫保護飼育(渋川市)・分散実施
R2 2020	7	1	444	54	540	62	991	117	幼虫保護飼育(渋川市)・分散実施
R3 2021	28	3	278	30	1,335	142	1,641	175	幼虫保護飼育実施（渋川市）
R4 2022	0	0	284	30	1,912	185	2,196	215	植生調査開始（柵内・柵外）
R5 2023	0	0	63	7	30	3	93	10	**全卵保護・分散飼育実施（渋川市・昆虫の森）**
R6 2024	0	0	81	10	89	9	170	19	**左記のほか人工飼育分として20卵塊249卵、分散飼育実施（渋川市・昆虫の森）** **現地の幼虫分散実施**

※卵数は卵の状態で確認出来なかった1～2齢までの幼虫も含む
「赤城姫を愛する集まり」による調査、機関誌『赤城姫』より作成